

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	黄 潔
論文題目	セン (Senl) の民俗誌 —中国南部におけるトン族 (Kam) の流域社会システム論—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、中国南部に居住する少数民族トン族の社会組織を、センという河川流域社会システムに着目して描き出すことを試みた民俗誌である。広義のタイ語系民族の分布圏の北端に位置するトン族は、同系統の民族の中にあっても漢文化の受容の度合いが高く、そのためトン族の社会組織の分析は、款 (盟約) や宗族といった漢語の分析概念の無批判な適用によって行われてきた。それに対し本論文では、センというトン語固有の概念に即してその地域社会の論理を内側から描き出すことを試みている。</p> <p>第一章は序論であり、本論文全体の立場が示されている。本章では、漢語の分析概念の無批判な適用に基づく従来のアプローチが、トン語に固有の地域概念への視野を全面的に欠いているという問題点を指摘し、それに代えてトン族の地域社会概念を内側から理解する鍵として、センという流域概念に着目する必要性が提示される。</p> <p>第二章では、トン族地域社会の編成原理における地縁の論理と親族の論理について考察が加えられている。トン語では村落社会はトゥアンシャイと呼ばれ、父系出自集団はプラと呼ばれる。トン族は漢語を書記言語として用いるため、プラは文語レベルでは漢民族の宗族に相当するものとして記述される一方、地域社会は親族用語によって言及される傾向にあるため、トゥアンシャイやその流域的まとまりであるセンが一個の宗族であるかのように語られるという現象を生み出している。</p> <p>第三章では、トン族固有の親族組織と漢民族の宗族の論理との相違と、それを調停するための制度がとりあげられる。トン族は漢姓を用いる一方で、漢民族とは異なり同姓間の結婚は忌避されてこなかった。ここから生じる、漢民族の宗族における同姓不婚原則との齟齬を回避するために生み出されたのが、同一姓集団を複数の姓に名目上分割するという制度である。また複数の姓の使い分けは、新規移住者が自分たちの旧姓を保持したまま先住者のプラに合併する場合にも適用されており、血縁関係のない先住者と後住者との関係を親族用語で語ることを可能にしている。</p> <p>第四章では、地域集団が出自集団として読み替えられていくメカニズムを、村落祭祀と祖先祭祀の事例から検討する。トン族社会においては、それぞれのセンやトゥアンシャイごとにサーや飛山といった神が祀られている。これらは土地神であるが、しかしその祭祀権は地域社会内の有力プラの長老が兼帯することになるため、祭祀集団が出自集団と重なる傾向を帯びることになる。各プラの祖先祭祀も同様に、後来の劣</p>			

位集団が先住者の有力プラの分節として吸収されていることから、地域集団を出自集団として表現する傾向を補強する役割を果たしている。

第五章では、トン族の地域社会の凝集性とダイナミズムを規定する因子として、人々の通婚圏が分析の俎上に載せられる。トン族社会においては、部外者の影響を排除し地域社会内の結束を維持するために、地域社会内での内婚が重視される。ここでは劣位の外来者集団は通婚圏から排除されるが、しかしこれはあくまで、姓集団の合併に伴う通婚規制の適用として処理される。通婚圏に関するこうした慣行は、地域社会が親族モデルで語られるという事実と、それにもかかわらず後住者が先住者から排除されて従属的な地位に置かれているという現実をともに説明している。

第六章では、トン族地域社会のリーダーシップの特徴が検討される。トン族の地域社会の特徴は、常設のリーダーをもたないことである。それぞれのプラは、親族集団の長老を意味するニンラオと呼ばれるリーダーを有しており、トゥアンシャイ内部のプラ相互のトラブルはトゥアンシャイのニンラオが、トゥアンシャイ相互のトラブルはセンのニンラオがそれぞれ随時選出されて問題の解決にあたる。これらは、その領域内の有力プラのニンラオから調達されるため、地域社会のリーダーシップもまた、親族用語で表現されることになる。

第七章は結論である。以上の考察からは、トン族社会の構造を、河川流域ごとに割拠する無頭的な村落連合の集合体として把握すべきことが明らかになる。その特徴は、地域集団があたかも出自集団であるかのように表現される点、および、そこでの社会像が書記言語としての漢語のバイアスに常に引きずられる点に求められる。トン族社会に見られる、出自集団の合併や分割、特定の先住者集団による一部後住者集団の包摂と排除といった一連の動態は、いま述べた建前と現実との差異を埋めるための試みとして了解可能であるとするのが、本論文が新たに提示する視点である。

(論文審査の結果の要旨)

中国少数民族研究における古くて新しい難題は、漢語のバイアスをいかに相対化し、当事者レベルでの認識に即した社会像をいかに提示するかという点である。漢語で記述される官憲の記録、あるいは漢語を用いてなされる現地調査においては、漢語のバイアスに従って当該社会を切り取り、その社会における漢化の度合いを測定するという作業がこれまで繰り返されてきた。そうした限界を乗り越えるべく、本論文では、中国南部のタイ語系民族のひとつであるトン族の事例をもとに、東南アジアのタイ語系諸族の社会の研究から得られた知見を参照しつつ、当事者たちの民俗語彙に立脚した内側からの社会像の提示を試みている。

本論文の学術的な意義は、以下の三点である。

その第一は、中国少数民族研究に東南アジア研究の知見を導入することで、「住民の視点から」の新たな社会像を描き出していることである。これまでのトン族社会の研究は、款（盟約）や宗族といった漢民族社会を記述する概念の無批判な適用によってなされてきた。それに対し本論文では、タイ語系諸族の盆地社会論を参照することで、同一の河川流域圏を意味するセンというトン族独自の地域範疇の重要性を明らかにしている。さらに本論文は、こうしたセン社会の動態を、地域社会を出自集団の用語で表現しようとするトン族独自の親族理念と、非血縁者の移入によって形成されている地域社会の現実との緊張関係から説明することに成功している。

本論文の二つ目の意義は、本論文が幅広い資料の渉猟により、トン族社会の全体像に肉薄する試みを行い、文書資料とフィールドワークとの高次元でのバランスを達成していることである。本論文で用いられている資料は、各地のトン族の民族誌のほか、地方誌、碑文資料、族譜、さらにはトン語の歌謡や口碑伝承に及んでいる。これらの文献資料や口承資料を骨組みとし、フィールドでの参与観察で得られた人々の行動や価値観に関するデータを肉づけしていくという方法は、理想的な民族誌のあり方を示しているといえる。

三つ目の意義は、民俗語彙の世界と漢語の世界との緊張関係という新たな切り口から、中国少数民族の社会・文化面での動態への接近を試みていることである。本論文は、調査に際して中国語とトン語の双方を併用することで、両者の意味のズレを的確にすくいあげ、そのズレから生じる社会の動態の解明に成功している。特に意義が大きいのは、漢語の使用に由来するバイアスが、研究者のみならずフィールドの当事者をも呪縛しているという発見である。トン族の親族規範は漢民族のそれとはまったく異なる特徴をもつが、書記言語として漢語が用いられているために、それをあたかも宗族のように表現・運用しようという力学が常に働いている。この、宗族とは似て非なるヴァナ

キュラーな現実と、それを少しでも宗族に近づけようとする書記言語からの圧力との緊張関係が、トン族社会における一連のユニークな社会制度を作り出してきたことを本論文は明らかにしている。

以上のように本論文は、中国世界と東南アジア世界の双方にまたがるトン族の社会構造を、中国研究と東南アジア研究の知見の総合によって描き出す試みであり、華南少数民族社会の動態についての新たな理解を示したきわめて優れた研究である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。